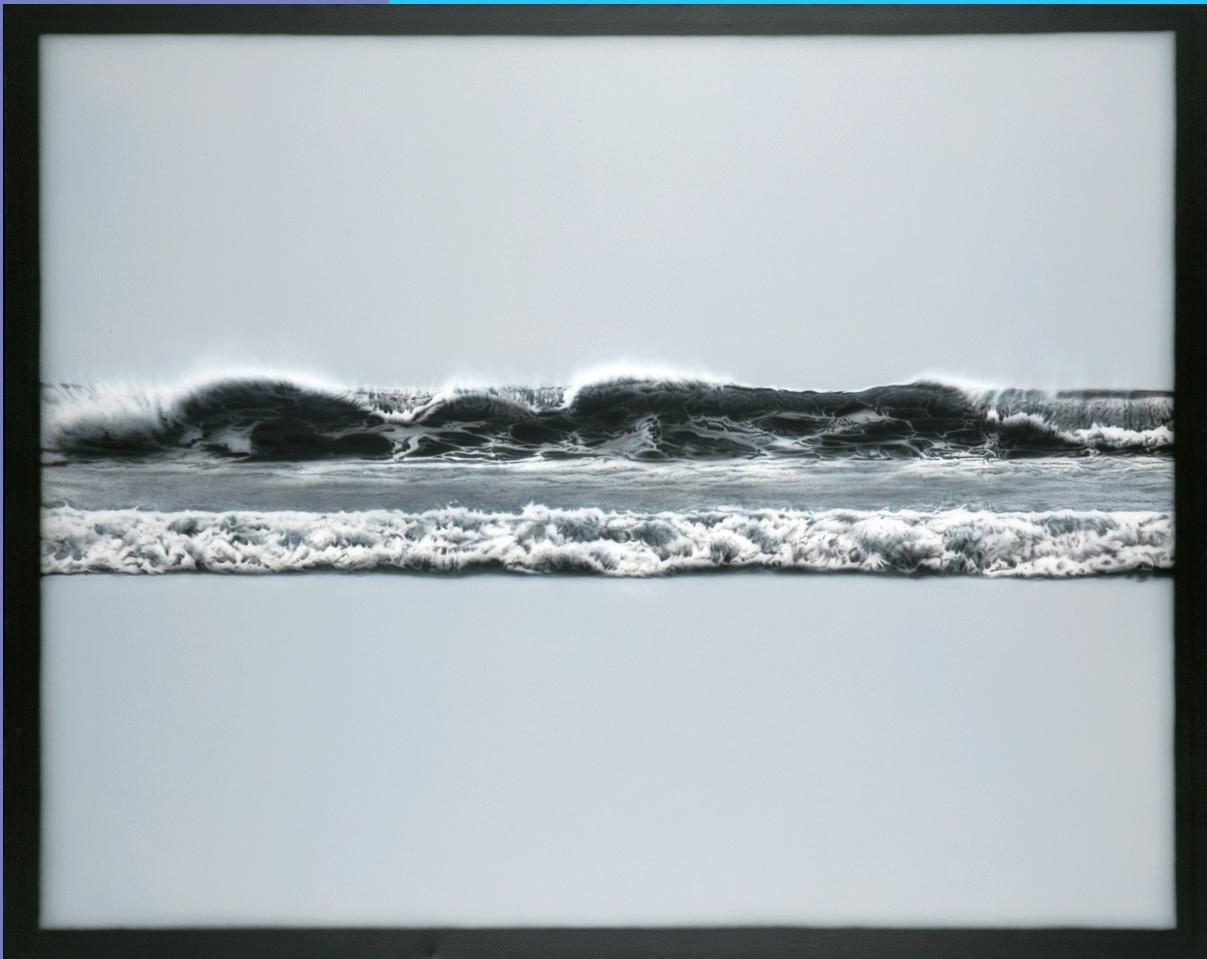


# news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA



鳴剛《無題 F》1982年 アクリル、キャンバス  
なつやすみの美術館「みること」「うつすこと」展より

# つくはえ【月映】について

いま、生誕120年を迎えた恩地孝四郎と藤森静雄の特集展示を開催している。このふたりに来年生誕120年を迎える田中恭吉を加えた3人が、大正初期に詩と版画の雑誌を刊行する。題して、『月映』。この雑誌は、1年と数ヶ月の間に7冊刊行されたが、各号200部しか印刷されなかった。当時はそれほど世間の注目を集めただけではなかったが、現在ではその希少性とともに、その内容（版画作品や詩などの文字表現）が高く評価されているものである。

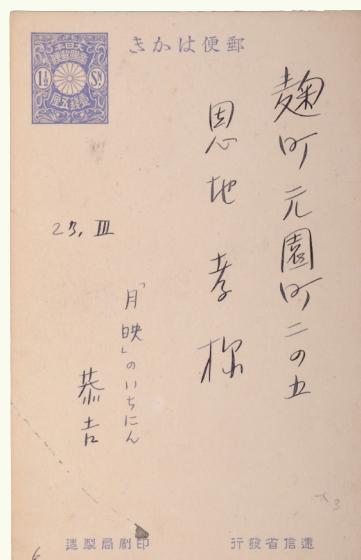
この雑誌は、表題のように「つくはえ」と読むのだが、美術や文学の研究者、そして愛好家のあいだで、「つくばえ」と濁って発音したり、表記したりする人が少なくない。これは『広辞苑』にそのように記載されているからである。どこでどうまちがってそうなったのか。いま手元にある『広辞苑』を見てみると、第2版（1969年、20万語収載）では影も形もないのが、第4版（1991年、22万語）では「つくはえ【月映】美術雑誌。1914年（大正3）9月、田中恭吉（1892－1915）・恩地孝四郎らが発刊。翌年11月終刊。」とわずか二行ながらも、立派にそして正確に載っている。それが、第6版（2008年、24万語）では、「つくばえ【月映】詩と版画の同人雑誌。1914年（大正3）9月、恩地孝四郎・藤森静雄（1891－1943）・田中恭吉（1892－1915）が発刊。1年後終刊。」と、藤森の名が追加され、また当時からそう表記されていたように「詩と版画」というなおさら正確な言葉も足され、三行に増えているものの、つく「ば」え、なのである。

わたしは別に犯人捜しをしようとしているわけではない。新村出編『広辞苑』には絶大なる信頼を寄せてきたし、いまも常に最初に見るのはこの辞書である。なにより、月映や田中や藤森の語を載せ

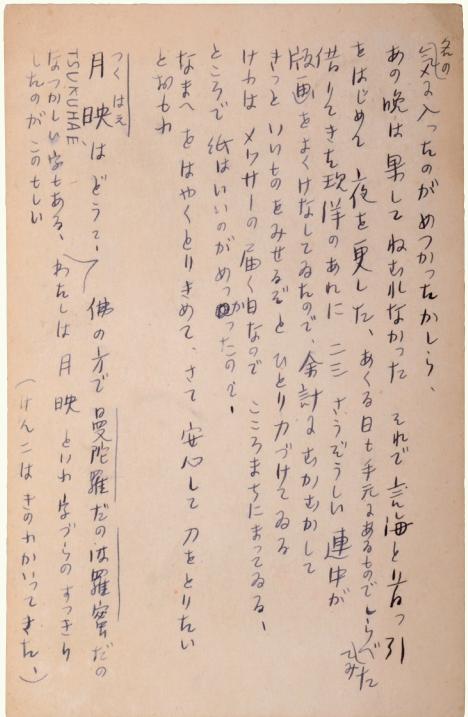
ていることは、賛美こそすれ、批判めいたことを言うのは憚られる。双璧といわれる『大★林』とか、あるいは近年勢力を強めつつある『日本語大★典』とか、なんと『世界美術★典』のような美術の専門辞書でさえも、月映も田中恭吉も藤森静雄もでてこないのだから、『広辞苑』編集者の慧眼によってこそ、私たちの凡眼も開かれよう。ここで「は」が「ば」になったのは、消しゴムのカスが原稿についてしまっていたのか、インクが飛び散ったのか、そういう些末な事情が引き起こしたのだと考えよう。あるいは、みなさん、あのページをご覧になる際には、どうかあれは印刷の汚れかなにかだと思っていただきたい。

月映というのは、田中恭吉の造語のようである。1914（大正3）年3月22日と23日に、田中が恩地孝四郎に宛てた葉書に出てくる。

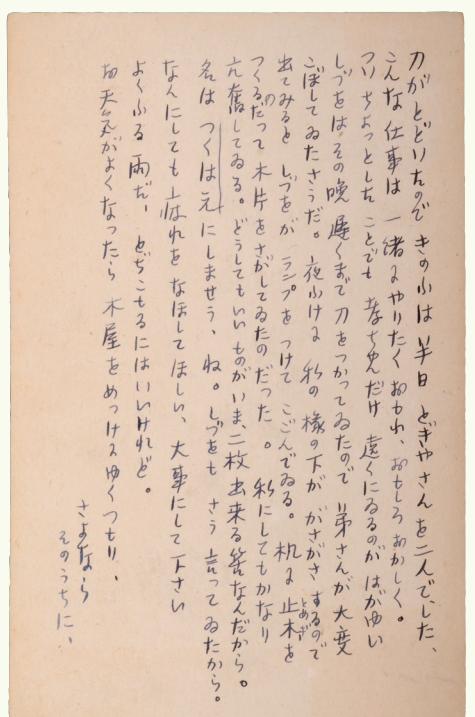
まず、22日の葉書[図1]。最後に少し大きく、「月映はどう？ わたしは月映といふ字づらのすつきりしたのがこのもしい」とあり、「月映」にははっきり



[図3]



[図1]



[図2]



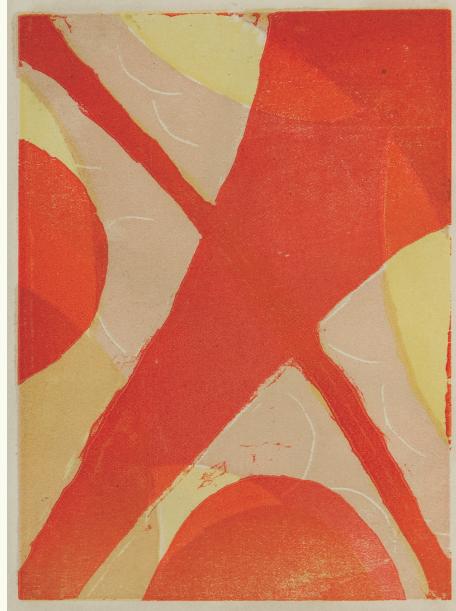
[図4]



田中恭吉《病める夕》(『月映』I所収)



藤森静雄《亡びゆく肉》(『月映』IV所収)



恩地孝四郎《抒情 跳る》(『月映』VI所収)

「つくはえ」と傍線付きのルビがふられ、「TSUKUHAÉ」とアルファベットの表記もつけられている。

そして翌23日の葉書[図2]。真ん中より後ろに、やはり傍線付きで「名はつくはえにしませう」とあり、この葉書の表[図3]の差出人のところには、「月映」のいぢにん 恭吉とある。

そして、この年の9月に洛陽堂から刊行された『月映』I号の表紙[図4]には、「月映」の文字の上に「TSUKUHAE」と乗せられている。

田中は先ほどの葉書で、『言海』という辞書で言葉を探したとあるが、この辞書にはもちろん「月映」という項目はない。手元にあった別のものを見たようにも書いているが、私の手元にあった『大漢和辭典』(大修館書店)で「月」のところを見ると、「月のひかり、つきかげ」として、宋史から陸佃の「居貧苦學、夜、無燈、映月讀書」が引用されている。田中もこの「月に映じて書を読む」部分を見たのだろうか。

それにしても「月映」として「つくはえ」と読ませるのはどうだろう。なかなか、そうは読めないようにも思えるが、さればどう読む?

「つき」を「つく」と読む、イ音がウ音に変わるのは上代東国方言だと、ものの本には書かれているし、『廣辞苑』にも同じように書かれていて、また「つき」の古形であるとも説明され、例として「月

夜」(つくよ)が出ていている。記紀神話で天照大神の弟で月の神様は「つくよみのみこと(月夜見尊)」というそうである。だが、これでは答えにならず。しかし、「つくはえ」という読みだからこそ『廣辞苑』にも載ることになったのではなかろうか。

『月映』やそれをめぐるさまざまなことを書き連ねても、『月映』そのものの魅力を伝えることのできない歯がゆさを感じている。言葉で伝えきれないというだけでなく、展示をするにしてものぞきケースで見開きのものを眺めるか、額装された版画を見るか、ということになるわけだから、彼らが考えた究極的な「もの」としての存在とその魅力が伝わらないのである。かといって『月映』そのものを手にとってご覧いただくことはかなはず、技術的には随分進みつつあるコンピューターを使って、大英博物館がやっているダヴィンチの手稿のようにヴァーチャルに眺めもらう方法も考えるが、それはあまりに「もの」から遠く隔たっている。

肩幅の内側で、ためつすがめつ眺めることができ、版画と詩や短歌との共鳴を楽しむこともでき、大きさはもちろんその重さにまで思いが行き届いたレプリカが作れないものかと考えるが、私自身の力不足に加え、技術的な問題やそして経済的にも時間的にも今日許されるものではないようだ。

しかし、公刊から100年を迎えると

している今、どうにかして、近頃流行の単なるコピーを製本するような、「もの」から遠く離れた魅力のないものを造るのではなく、少しでもオリジナルに近い「もの」を、あらためて公刊できないかと考え、動き始めている。まだ端緒についたばかりで、どの程度なら実現できるのか試行錯誤の最中だが、必ずやいいものができると意気込んでいる。

されば、次の『廣辞苑』では、正しく「つくはえ」にもどしていただけるはずなのである。  
(寺口淳治)



※『廣辞苑』における「月映」の項の引用部分は、読みやすいように漢数字をアラビア数字に換えてある。

# 還魂紙のこと

誕生120年記念 恩地孝四郎・藤森静雄



田中恭吉『そがれゆくぬくみ』より  
『埋葬』1914年 黒インク・ペン・金彩・紙

田中恭吉がその早すぎた晩年に親友の藤森静雄に贈ったペン画がある。20ページからなる小画集『そがれゆくぬくみ』(殺がれ行く温み)だ。「現身の形骸を捨てて永遠の創始に入るを歎きたまふな」と銘記されたこの画集は、妹を亡くした藤森をなぐさめるために捧げられたものであり、また、田中はほぼ同時期に恩地孝四郎へ『心原幽趣 II』と題するペン画集を、大槻憲二に「絹はれゆく歓喜と悲哀」と題するペン画を葉書に描いて贈っていることから、田中自身が親しい友人たちに生前の交友のしるしを遺そうとした一連の作品のひとつとも考えられる。

『そがれゆくぬくみ』の中の二つのペン画に、光沢のある肌理の美しい薄緑色の和紙が使われていることがずっと気になっていた。藤森はこの色をよく自身の作品に使っている。《五月》《一のみち》など、田中や恩地と共に制作した三部限

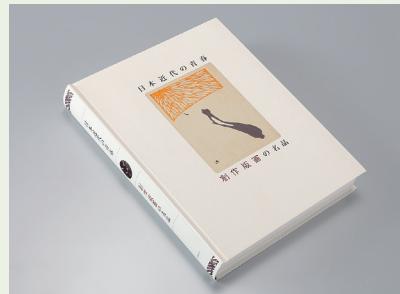


藤森静雄『五月』1914年 木版、紙  
＊私輯『月映』III ひかるもの 所収と推定される



藤森静雄『一のみち』1914年  
木版、紙  
＊私輯『月映』III ひかるもの  
所収と推定される

定の版画集、私輯『月映』(その後200部で公刊された)でも繰り返し使っており、時にはキラリと併用してその薄緑色がかすかに光るように見せている。田中は藤森のために、藤森が好きだった色の紙を探して選んだのだろうか。



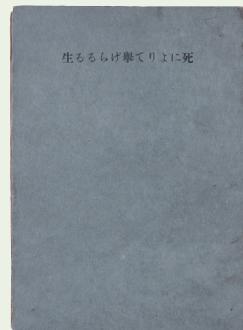
「日本近代の青春 創作版画の名品」展カタログ  
当館（2010年9月18日～10月24日）と宇都宮美術館（2010年11月21日～2011年1月10日）で開催  
協力：高知県立紙産業技術センター 助成：財団法人花王芸術・科学財団

昨年、「日本近代の青春 創作版画の名品」展を準備するにあたり、修復や製紙技術の専門家の方々と当館コレクションをもとに創作版画に使われた紙について調査する機会に恵まれ、その際にこの『そがれゆくぬくみ』の薄緑色の和紙についても、元高知県立紙産業技術センター技術部長の大川昭典氏に見ていただいた。大川氏は正倉院の文書をはじめ古今の文化財に用いられた紙について長年、調査研究に携わって来られた方である。大川氏は一見して「紺紙を漉き返した藍紙のようだ」と印象を述べられた。

科学的に分析してそうだというのではない。ただ、その薄緑色の和紙のもつ雰囲気が、大川氏がこれまでに見てこられたものとどこか似通っていたのだろう。土佐和紙として知られる紙には版画家の永瀬義郎も使った上質の紺紙がある。詳しくは聞かなかったが、歴史的に重要な紙の中で、奈良時代の紺紙が漉き返され、平安時代に薄緑色の紙となって使われた例があるようだ。

「漉きえし」  
「漉きえし」とは紙が今よりもはるかに貴重だった時代に、古紙を再生するために漉き直して墨色が薄く残った紙を指し、江戸期には鼻紙に用いられたというが、一方で「還魂紙」と書いて「すきかえしかみ」と読まれることもある、と知ったのはその後のことだ。親しい人が亡くなると、故人の魂が宿っているとされる手紙を漉き直し、写経して供養をする風習がかつてあったという。

藤森の妹を追悼するため『死によりて挙げらるる生』と題してまとめられた公刊『月映』の4号でも、その表紙にはやはり緑を帯びた薄墨色の紙が使われている。だが「還魂紙」の謂われを田中や藤森が果たして知っていたかどうか、今はわからない。できることなら、時空を越えて尋ねてみたいものだと思う。彼らも「気づいた?」とか「へえ、そうなの」とか言って喜んでくれるのではないかしら。こうなると想像の域を出て妄想めいてくるのだが。



公刊『月映』IV  
死によりて挙げらるる生 表紙  
1915年 洛陽堂



恩地孝四郎『死によりてあげらるる生』  
1915年 木版、紙  
＊公刊『月映』IV の扉に機械刷りで収録されたもの

この夏、田中よりも一年はやく生誕120年を迎えた恩地孝四郎と藤森静雄、ふたりの作品を展示室であらためて見直しながら、田中が生まれ育ち、恩地が父親の故郷として「胎生前の郷土」と呼んだこの和歌山で、彼らの遺した作品が今も生命を宿し澄んだ音色で響き合うのを感じている。

(井上芳子)

生誕120年記念 恩地孝四郎・藤森静雄

2011年6月28日～9月4日

館蔵品を中心に個人コレクションも含め125点を展示



当館では、さまざまな視点からテーマを設けて、コレクションを紹介していますが、今回の展覧会では「みること」「うつすこと」をテーマとしました。

現在は、みることもうつすこと、ある意味で当たり前となった時代です。デジタルカメラなどの普及により、誰でも簡単に画像を手に入れることができますし、あらゆる場所に複製画像が溢れています。こうした時代にあってこそ、改めてこのテーマと向きあう必要があるのではないか、考えてみる意味があるのではないか、そんな思いもあり、この展覧会を企画しました。また会期が夏休みと重なっていましたので、この時期に来館することの多い子どもたちが、みることやうつすことの不思議や面白さを感じることも目的としました。

展示は「写真と美術表現」「光について」「存在をうつすこと」「写真と版画のあいだに」「時間と記憶」の5つのコーナーから構成しました。ここでは簡単ですが展覧会を振り返ってみます。

「写真と美術表現」でまず問いかけたのは、そもそも写真は真実を写しているの?ということでした。特に日本ではPhotographの訳語として「写真」が定着していることもあり、その言葉通り、写真は真実を写した

ものだと捉えられがちです。もともとPhotographは、光の絵とかいった意味なのですが、「写真のようだ」と言うとき、それは「本物のようだ」という意味とほぼ同義で使用されているように思えます。もちろん写真は現実を捉えたものですが、実際には意図的にトリミング

されたもので、後から編集したり加工したりすることも可能です。展覧会では、写されたものを一度疑ってみることから始めました。

最初に展示したのは、杉本博司のジオラマシリーズです。ダチョウや猿といった動物たちの生態を写したこれらの写真は、一見したところ、サバンナやアマゾンなどの現地に作者が取材して撮影したように見えます。しかし実際に撮影された場所は、ニューヨークの自然史博物館のなかに人工的に造られたジオラマです。動物は、みな剥製で、あたかも生きているかのようにポーズをとらされているのです。改めて写真を見直してみれば、これほどよくライティングされた自然の風景は、現実には存在しないことに気がつくでしょう。作者は「どんな虚像でも、一度写真に撮ってしまえば、実像になるのだ」と述べています。逆に言うと、写真は撮影する対象に対しては嘘をつかないということでしょう。嘘にも真実にもなり得るという曖昧さは、写真の魅力のひとつです。

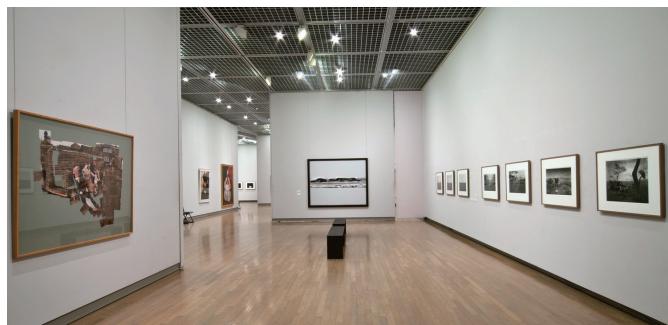
続いて展示した鳴剛の《無題F》は、写真と見違うような作品ですが、実は写真を克明に描写して引き延ばした絵画で、カメラのレンズ特有のボケまでもが、執拗に写

し取られています。現実の風景の描写で、この表現はあり得ません(波が押し寄せる瞬間を描くことがそもそも不可能ですが)。見ることについて、写すことについて、またリアルさについて、様々な疑問を作品は問いかけてきます。

「光について」では、るために不可欠な光とそのあらわれをテーマとしました。同じ場所から見える一年間の太陽の軌跡を撮影した野村仁のアナレンマのシリーズ。浜辺の流れ木に、太陽の光をレンズで熱に交換して焼き付け、写しとったロジャー・アックリングの作品。プリズムシートやビーズで動物の剥製などを覆うことによって、その見え方や在り方を問う名和晃平の作品。またプリズムによる分光を映像で捉えた吉田重信の作品などを紹介しました。

「存在をうつすこと」では、印画紙を直接感光させて画像を定着させる瑛九のフォトデッサンやマックス・エルンストのフロッタージュ、瀧口修造のデカルコマニー、あるいは人体をそのまま型取った飯塚二郎の作品などを展示しました。事物を直接写し取るとともに、ある種の偶然性に委ねた技法を用いて制作されたこれらの作品は、写すことの根源的な魅力にあふれています。また、写真のイメージを写真製版によって版画に取り入れた作品を集めた「写真と版画のあいだに」では、斎藤智、木村秀樹、安藤菜々、井田照一らの作品により写真と版画の接点を探りました。写真と版画を併用し、現実のイメージを二重に編集・加工することで制作された作品は、現実とそのイメージの間に差異について問いかげ、現実の視覚世界に揺さぶりをかけてきます。

最後の「時間と記憶」では、娘の成長の記録を写真に撮影し、さらに加工して版画



とした野田哲也の作品や、広島で被爆した人物や樹木を撮影して切手にした太田三郎の作品、自身の小学校時代の同級生の写真を、祭壇に祭るように展示したクリスチャン・ボルタン斯基の作品を紹介し、写されたイメージに宿る時間や記憶をテーマとしました。

「みること」「うつすこと」について広く捉えて、様々な表現の広がりや可能性を感じ



られるような展示を心がけました。知識がなくても体感できるような作品を多くしたり、ほぼ全作品に解説をつけたり、子どもを対象としたトークを開催するなどの工夫をしましたが、子どもたちにとっては、少々ハーダルの高い展覧会であったかもしれません。アンケートでも難しいという意見がありましたし、今後、検討が必要です。しかし一方で下記のような意見もあったことは嬉しい

ことでした。

「すごく気になる絵がいっぱいあった。でも、少ししまらない絵もあった。でもみてるうちにウキウキして、うれしくなった。ふしぎな絵とか写真があった。

つまらないのは、あったけど、きょうみぶかいものもいっぱいあった。えみたいなのに写真みたいのとかがあった。光の道【吉田重信《ヒカリノミチ》】はみているだけで気分がよくなつた。なんだかたのしかつた。(10歳女性／海南市)

「みること」に対する哲学的な解説から入ったあたりは大変おもしろくフムフムと思いながらみました。いつもおもしろくて好きです。子供が多くてよかったです。もっと身近な美術館であつてほしいので。(34歳女性／和歌山市)

もとより展示室は、県の節電対策により8月中の観覧料が半額になったことの後押しもあって、例年以上の来館者に恵まれ、賑わいを見せました。この展覧会が、多くの方々にとって、みることやうつすことの不思議や面白さを体感する機会となつたなら幸いです。(奥村一郎)

## 原画が違った《ブラック・クリスマスを夢見て》

「ポップ・アート」というと一般にはアメリカの現代美術だと受け取られているかもしれません。確かに、ウォーホルやリキティンシュタインといった代表的な作家が活躍したのはアメリカでした。けれども、映画やテレビ、あるいは広告などを通じて現代の日常にあふれる図像を芸術の視点からとらえ直して、新しい芸術の局面を開いたのはイギリスの作家たちであったとされています。その代表がリチャード・ハミルトン(1922～)でした。

当館所蔵の《ブラック・クリスマスを夢見て》(1971年 シルクスクリーン他、紙 57.3×79.0cm)は、往年の大スター、ビング・クロスビーが登場するハリウッド映画の一場面をそのまま作品とした、ハミルトンの代表作の一点です。

題名の元になっているのは、クロスビー最大のヒット曲といえる「ホワイト・クリスマス」です。今では、クロスビーを知らない人もこの曲は知っているという人も多いかもしれません。アーヴィング・バーリングが作詞作曲したこの曲は、クロスビーが主演した1942年の映画『ホリディ・イン(邦題:スイング・ホテル)』で歌われ、大ヒットしたものです。ハミルトンの《ブラック・クリスマス

スを夢見て》も、この映画の一場面を作品化し、「白」を「黒」と言い換えたものと言われてきました。(HAMILTON, Richard, *Collected Words 1953-1982*, Thames & Hudson, London, 1982, p.70)

ところが映画を見てみると、『ホリディ・イン』の中にはこのような場面はなく、大ヒットした曲にあやかって1954年に作られた別の映画『ホワイト・クリスマス』の一場面であることがわかりました。こちらはクロスビーとダニー・ケイが競演し、冬の観光地ヴァーモントで雪が降らないことから起こる騒動を描いたコメディーです。もしハミルトンがこのことを知っていたとするなら、「ブラック・クリスマス」という題名には映画の内容も含意されているかもしれません。

ハミルトン本人に確認したところ、自分もこの間違いに気付いたのはほんの数年前で、それまでは『ホリディ・イン』の場面



リチャード・ハミルトン《ブラック・クリスマスを夢見て》 1971年

だと信じていたとのことでした。自分が手に入れたのは、広報用に配られたネガフィルムの一コマで、その出所も今となってはわからない。だから映画『ホワイト・クリスマス』の物語とは全く関係なく、「白」を「黒」に置きかえたのは、クロスビーの人種差別的な言動を揶揄するものだったのだろう。

DVDが普及したおかげで、こういった映画の場面の確認が随分簡単になったのはありがたいですが、制作時の事情などはやはり作者本人しかわからないものです。

(奥村泰彦)

# ポップ? ポップ! ポップ♡

コレクションに見るポップなアートの50年

2011年4月29日[金・祝]—6月19日[日]

今年度最初の企画展「ポップ? ポップ! ポップ♡」は、当館のコレクションから「ポップ」をキーワードにして作品を選び、1960年以降現在までの美術を紹介する展覧会でした。以下、簡単にですが内容を振り返っておきたいと思います。

今回、展示は「ポップ・アートの誕生と展開」、「ポップ・アートと日本」、「現代日本のポップ」の3部構成としました。美術において「ポップ」というと、やはりアンディ・ウォーホルやロイ・リキテンスタインらの作品イメージとともに、アメリカを中心に行進したポップ・アートが思い浮かぶでしょう。

ポップ・アートは、漫画や商品パッケージ、広告など、ふだんの生活の中にあふれている大衆的(=ポップ)なイメージを、本来は相容れないと考えられていた美術の世界に持ち込んだものです。既製品を美術に持ち込むという動きはすでに行われていましたが、ポップ・アートは、大衆文化と美術をつなぐことによって、その表現領域を大きく広げることになりました。

「ポップ・アートの誕生と展開」では、先述のふたりとともに、トム・ウェッセルマン、ジェームズ・ロゼンクイスト、ジョージ・シーガルらアメリカの作家のほか、リチャード・ハミルトンやデビッド・ホックニーなど、イギリスの作家たちの作品も紹介しました。

ウォーホルがキャンベル社のスープ缶を描いた有名な作品を、最初に発表したのは1962年のことです。その後、1960年代に展開したポップ・アートの動きは、大きな時間差もなく日本へ伝わってきます。続く「ポップ・アートと日本」では、篠原有司男や横尾忠則、黒崎など、その表現や手法に影響を受けたり、関連が指摘できたりする1960年から1980年にかけての日本人作家による作品を紹介しました。

「よし、ポップで行くぞ。」\*というのは、アメリカの美術雑誌に紹介された、ウォーホルやリキテンスタインらによる展覧会記事を見て、篠原が発した言葉です。この言葉に象徴されるように、1960年代には、明るい色面構成や、大衆文化からのイメージの

転用など、その表現のあり方に呼応した動きが日本でも起こります。ただし日本人にとって戦後のアメリカ美術の受容は、それ程単純でもなかった様子もうかがえます。岡本信治郎がアメリカの有名な人物やキャラクターを解体し再構成した作品には、アメリカの文化に抱くあこがれと反感が、同時に表現されています。

その中でも幸福な出会いと言えるのが、吉原英雄の版画作品かもしれません。吉原は、ポップ・アートの手法を援用しながら、欧米のポップ・アーティストたちの主要な表現方法でもあったリトグラフに、銅版の技法を併用した独自の版画を生み出しました。その世界は、都会的で理知的な雰囲気を持ちながら、明るくポップです。本年11月から開催する「吉原英雄展」では、その足跡をご紹介します。

最後の「現代日本のポップ」では、ポップ・アートが開いた大衆的、日常的なイメージを作品に取り込む美術のあり方を、広くポップととらえ、森村泰昌や村上隆、パラモデルなどによる、1980年代から2000年以降の作品を紹介しました。

そもそもポップ・アートは、大衆性や日常性を主題とすることで、現実社会との接点を持ちました。ポップなイメージの中に、社会の実情を映し出し、時には批判的なメッセージも読み取ることができました。

しかし、現代日本を映し出す鏡といつてもいいはずの作品からは、それほど強い社会的メッセージ性は感じられませんでした。それより作品は、明るく、かわいい、また時には不気味なイメージをきっかけとして、見る者をどこか別の世界へ連れて行く、そんな装置となっているように感じられます。あ



会場風景「ポップアートの誕生と展開」



会場風景「ポップアートと日本」



会場風景「現代日本のポップ」

るいは、こういった社会へのクールな態度と、作られた世界への志向は、現代の日本を象徴しているのでしょうか。

もちろん美術は、つらい現実をシニカルに笑い、虚構の世界へ逃げ込むための手段ではありません。日常の中にあるふとしたことをきっかけにして、人間の内面にある生きる欲びに訴えかける作用を持っています。例えばパラモデルは、日常にちょっとした(時には大規模な)非日常を持ち込むことで、新しい世界を作り出します。その作品は、現実に少しの想像力や冒險心を持ち込むことで、世界が変わるという明るさを見る者に与えてくれます。

おかげさまで今回の展覧会には、多数の方がご来場ください、会場では作品を見ながら、こちらが思っていた以上に、「?」「!」「♡」が飛び交っている様子がうかがえ、担当者としてもうれしい限りでした。ご来場くださいました皆様には心から感謝申しあげます。  
(宮本久宣)

\*篠原有司男『前衛の道』(美術出版社、1968) 117頁。

## 和歌山ミュージアムウィーク



バックヤードツアーにて修復作業を見学する参加者

5月18日は「国際博物館の日」でした。博物館の役割を広く人々に知ってもらう日として、1977年に国際博物館会議（ICOM）が定めたものです。日本では2002年から記

念事業が行われています。

「博物館」にはいわゆる博物館や美術館だけでなく、水族館、動物園、さらには科学館や植物園なども含まれます。つまり特定の分野に関する資料を収集、調査、保存、公開する役割を持つのが「Museum：博物館」なのです。和歌山県には近代美術館、博物館、自然博物館、紀伊風土記の丘という県立の博物館施設が4館ありますので、国際博物館の日を記念し、5月1日（日）から21日（土）まで合

同で「和歌山ミュージアムウィーク」を実施しました。

4館すべてのスタンプを集めると、

（青木加苗）

ご希望の館でプレゼントをもらえるというスタンプラリーを実施し、当館では100人以上の来館者がスタンプを押して参加されました。また会期中には各館で講演会やバッカヤードツアーを、最終日には4館が近代美術館に集合してスペシャルプレゼント抽選会などを開きました。美術館入口前のアプローチプラザでは、紀伊風土記の丘と自然博物館が出張展示を行い、美術館を訪れた方が、土器や生き物に触れる機会が設けられました。博物館の多彩な活動に触れていただける機会になったことだと思います。

## 当館ホームページがリニューアル

当館ホームページが、今年度に入ってからリニューアルしました。

デザインを一新し、より見やすく使いやすいページになっています。

展覧会やワークショップといった美術館の最新情報は、ぜひこのホームページでチェックしてみてください。これからも随時バージョンアップしていきます。メールマガジンやニュースともども、どうぞよろしくお願ひいたします。

新しいURLはこちらです。 <http://www.momaw.jp/>



4 5 6 7 8 9 Museum Calendar 10 11 12 1 2 3

### 生誕100年 高井貞二展

9月3日（土）～10月16日（日）

和歌山県高野口町で育ち、東京とニューヨークを舞台に活動した画家、高井貞二（1911～1986）。画家・イラストレーターとして活躍した姿を追います。

高井貞二《感情の遊離》1932年



### 吉原英雄展 画家のドラマ

11月19日（土）～2012年1月15日（日）

銅版と石版という異なる技法を一つの作品に用いた代表作を中心に、吉原英雄（1931～2007）の足跡を振り返ります。

吉原英雄《シーソー 1》1968年



### ホックニーのグリム童話

2012年2月11日（土・祝）～3月25日（日）

世界に対する鋭い洞察を親しみやすい表現で作品にするイギリス出身のデイヴィッド・ホックニー（1937-）。版画や写真、約90点によりその魅力に迫ります。

### コレクション展 2011－秋

#### 生誕120年記念 特集 保田龍門

9月17日（土）～12月4日（日）

保田龍門《少年》1912年



### コレクション展 2011/12－冬

#### 特集 吉原英雄を囲む作家たち

+ 生誕130年 日高昌克

12月20日（火）～2012年2月19日（日）

開館／9時30分～17時00分（入場は16時30分まで） 休館／月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

## メールマガジンのご案内

展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイマーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。ぜひご利用ください。



## 友の会 会員特典 いろいろ

1. 展覧会の無料観覧（同伴者1名まで）
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
6. 版画の颁布会への参加

## 入会のご案内

一般会員 6,000円  
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690

担当：松原

